

「もう、ベルはいつもそうなんだから……」

「ショートケーキ、オレの分のイチゴあげるからさ。いいだろ？」

「ムム……しようがないなあ。今度こそ約束だからね？」

「しっ、りょーかい♪ んじゃ行くか！」

「あ……」

マーモンを抱え直すと、善は急げとばかりに走り出すべし。

ぼつんと取り残されたフランは、廊下の奥へとベルの後ろ姿が消えていくのをただ呆然と見送るしか出来なかった。

「……ミーの存在すっかり忘れてますよねー。別にいいですけどー」

元々は一人でんびり軽食を取ろうと部屋を出て、そこで偶然ベル達と鉢合わせただけなのだ。存在を忘れられたところで痛くも痒くもない。

人の恋路に興味はないし、いい加減小腹も空いてきたのでラウンジに向かおう。

そう思いかけ、ふと足を止める。

「でも、確かにこれはロン毛隊長を冷やかすまたと

ないチャンスかも……うーん、どうしようかなー」

ラウンジに軽食を取りに行くか、スクアアロを冷やかしに行くか。

考えるまでもなかったかと結論を出す、フランはベル達の去った後をゆっくりと追い掛けた。



「あらヤダ、素敵♡」

「素敵、じゃねえ!! これは一体どういうことだあ!!」

ホテル内二階にある、フライダルサロン。

その室内にスクアアロの怒声が響き渡る。

何事かと奥から出てきた係員に「大丈夫」と目配せして下がらせると、ルッスーリアは事も無げに言った。

「どういふことも何も見たまんまよ。ウエディングドレスの試着♪」

「うおおい!! ルッスーリア、てめえ何考えてやがる! 結婚すんのは跳ね馬だろうがあ!! 明日

のパーティーに着ていくゲストドレスを見に来たはずなのに、何でオレがウエディングドレスなんて

試着しなきゃなんねえんだあ!!」